

恩師田中元治先生を偲ぶ

1926年2月11日岐阜県で生まれる。1948年東京帝国大学理学部化学科を卒業。1950年名古屋大学理学部助手、1957年同助教授、1963年同教授に昇任し、理学部化学科分析化学講座を主宰。1980年名古屋大学評議員、1983年同理学部部長等を歴任。1989年名古屋大学を定年退職、名古屋大学名誉教授。1955年パリ大学留学（フランス政府給費留学生）、1957年理学博士、1970年本会学会賞、1974年工藤学術財団褒賞・山路ふみ子自然科学奨学賞、2004年瑞宝中綬章。本会中部支部長・理事・副会長・1993年会長・名誉会員、日本化学会副会長・東海支部長等を歴任。文部省大学設置審議会専門委員・理学視学委員・学術審議会専門委員、日本学術会議会員等を歴任。2002年 Fellow of the Royal Society of Chemistry.



本会名誉会員田中元治先生は2017年11月2日に91歳8月余の天寿を全うされました。通夜及び告別式は、近親者のみで執り行われました。筆者は初七日前の8日にご自宅にお参りにお伺いしました。ここ2年は骨折とガンで入退院されたが、その都度回復され、身の回りのことは全てされていたが、虚血性心不全で急逝された。娘さんが穏やかにピンピンコロリでしたとおっしゃったとき、筆者の目が潤んだ瞬間でした。2018年3月に田中研究室同窓生が集って「田中元治先生を偲ぶ会」を開くことになっています。

筆者は先生が分析化学講座教授になられた時の最初の学生です。学位取得後、助手・助教授として、先生のご指導のもとで研究してきました。ここに先生のご略歴、業績、思い出を略記します。

田中先生は13年間菅原健先生のもとで、地球化学的な観点から湖沼の化学的研究をされてきたが、1963年から分析化学講座を主宰され、「溶液内反応の平衡論的及び速度論的研究とその分析化学への応用」という意図を持って研究を始められた。この主題は最後まで深く追求された。以下に先生の研究業績の主なもの挙げる。

(1) 初期の地球化学的研究として、信州の木崎湖において、硝酸還元過程の中間体としてヒドロキシルアミンが存在することを発見した。それがNatureに掲載された。(2) 「配位子緩衝液」という新しい概念を提出し、金属イオンや配位子を含む複雑なキレート滴定などを定量的に理解することを可能にした。(3) 高級カルボン酸による金属イオンの溶媒抽出を多くの金属イオンについて研究し、多量体の抽出種の組成を明らかにするとともに、金属錯体やその付加物の溶解パラメーターを算出することに成功した。(4) 分析化学反応に関わる多座配位子置換反応など各種溶液内反応を平衡論的及び速度論的に研究し、詳細に反応機構を解明した。(5) 溶液内反応の速度の圧力効果の測定は、反応機構の解明に有用であることに注目して、2000気圧の高圧下でも迅速反応を追跡できる高圧ストップフロー装置を開発した。圧力効果から活性化体積を算定し、各種溶液内反応の機構を解明した。

これらの成果は二百数十編に登る論文として、国際誌に発表されている。研究活動は分析化学にとどまらず、

広く錯体化学、溶液化学、無機化学などの分野に及び、初期の地球化学的研究と相まって、視野の広い、学際的なものである。著書・訳書は20余編に及び、分析化学の知識と普及に多大の貢献をされている。御退官されて15年後に、名古屋大学大学文書資料室が設置されたので、「田中元治論文集」3冊子を製本し、收藏してもらった。先生にお伝えしたら大変喜んでくださった。

田中研究室での勉強・教育は「分析研セミナー」だったと思う。このセミナーは毎週十分に長い時間をかけた。洋書を音読・説明する輪読、英文論文を紹介・解説するコロキウム、各人の研究実験の進捗報告をする中間報告の3点セットである。厳しい指摘・質疑応答があった。2、3週に順番が回って来るのを気にしながら、徹夜をした学生も多かった。先生から直接に実験の指示はなかった。研究もかなり自由に進められた。したがって、先輩・同僚と相談し、自身で試行錯誤することになった。研究論文は英語で書くことになっており、自身で論文を書き始めないと論文にならなかった。原稿素案を出すと先生から丁寧な修正や教示があった。このような訓練・経験のおかげで、田中研究室同窓生119名中、大学と国立研究機関に就職した20名の卒業生は、最初からそれなりに英語で論文が書けたのだろう。

先生のお人柄は、先生の座右の名どおりである。学生の誰もが、初めはおっかなくて近づき難いと感じるが、少しご指導を受けると思いやりのある、優しい「田中さん」であることを知る。研究室内では、全員が田中先生ではなく、田中さんと呼ぶことになっていた。不思議と誰しも違和感なく慣れた。筆者などは、外で田中さんと言って、周りの人に怪訝な顔をされることが何度もある。名大御退官の時の最終講義の最後に、黒板に大きく横に書かれたのが「以和為貴」である。人の和を非常に尊重されるお人柄と感じていたが、先生の本 motto であることを知り納得した。

田中先生には多大なご指導を賜り、心から感謝申し上げます。ご冥福をお祈り申し上げます。

〔名古屋大学名誉教授 舟橋重信〕